

佐賀市史

中巻

佐賀市史

下卷

序

曩に佐賀市制五十周年記念事業として、當時の市長橋爪勇氏が佐賀市史編纂を計畫せられ、末次藤太郎氏に囑して修史に當らしめ、昭和十九年十二月稿成り、その上卷を上梓せしが時既に、第二次世界大戦酣なるの時、應召、徴用等による工員不足とあらゆる物資の拂底とにより非常な困難に遭遇し、漸くにして鹿島印刷会社の手により、翌二十年一月發行の運びとなつたのである。

而して下卷も引續き起稿せられてあつたが、時局は益々繁雜とり到底市史發刊の遲なきに至つた、既にして同年八月十五日終戦の大詔は煥發せられたるも、爾來七年間連合軍の占領下にあつた關係上これら印刷刊行の事も差控えてあつたのである。

然るに今回講和條約成り、獨立國として新日本建設の機を迎えたれば、元橋爪市長の意を継ぎ、茲にその下卷を上梓することにしたのである。

この下卷は教育、風俗、兵事、社會、衛生、技藝、其の他に亘り、從來の足跡をくまなく集録せられてあるから、將來の事に關する大方の好個の資料とも

なれば、幸甚とするところである。

尙この下巻を完成するにあたつては、編者末次氏が病軀にもかゝわらずその苦痛と闘い、あらゆる資料を蒐集し『此の稿成らすんば、吾れ死すること能はじ』の氣魄を以て事に當られた崇高なる責任觀念と多大の御努力に對し衷心から感謝の意を表する次第である。

また公私御多用の央を割いて校閲の勞を執られた野口能毅、千住竹次郎、大木友次郎、嘉村彦四郎、新ヶ江助次郎の諸先輩、並びに貴重なる資料を提供せられ、或は御助力を賜つた各位に對して、深甚なる謝意を表する次第である。
一言以て卷頭の序とする。

昭和二十七年九月一日

佐賀市長 小野哲一

下巻の端書き

一、佐賀市の嘱託を受けてゐた「佐賀市史」は、曩きに昭和二十年一月、上巻の印刷発行を終り、引続き下巻の編纂に着手し、これ亦既に脱稿して草稿を納致してゐた。

一、上巻の発行は、橋爪市長在任当時にして、其後今日まで、未だ下巻の発行を見るに至らず、ソハ編者病氣の爲め、脱稿の遅れたる故でもあつたが、また別に或事情の存するありて其累を避けんとせし爲でもあつたが、既に本史編纂終了後、永き間の発行を見ざりし爲め、世間多くば下巻の未発行を忘れんとしてゐた位であつた。

一、偶々今春、市議員井手赫次氏が、この事を聞知し、折角脱稿せる下巻草稿を、其儘放置しあるを遺憾とし、現市長小野哲一氏に語りたるに、小野市長もソハ初耳なりとて驚き、下條に質し、依てこれを印刷に附することとなり、茲に初めて上下二巻の佐賀市史が七年有餘を経て完成するに至つた。

一、編中、或は同一事項を記載する如き所あるも、コハ記事の都合上、己むを得ざるものありて重複を厭はず記載して居る。

一、本史は元来昭和十四年の市制施行五十周年記念として編纂せしもので、収録せる各種の統計、其他の記事も同年度までを限り記して、記念の趣旨に副はしめてゐるので、下巻の記事も亦同年度までを限つて居る。

一、また材料集蒐にあたりても、編者が病軀に鞭ち、孤独無援の間に集めしものなれば、到底充分なるを得ず、或は誤謬もあるべく、或は脱漏せるものもあるであらう、此等は他日の訂正補充に譲る事とせしやう。

一、本史の装釘に方り、画伯山口亮一氏より、表紙図案として鍋島氏の定紋に象れる片若荷崩しと、表紙裏の見返へしに、樟の枝を描ける頗る優雅なるものを寄せられたるが、前記の如く時恰も交戦中にして、其実現に諸物資を得難く、己むを得ず質素簡單なる表紙を附して、上巻を発行した、今この下巻装釘に就て、其図案を見出せども、永年放任したる故が、何れにあるや其所在更に知ること能はず、左れど上巻同様の表紙にては、餘りに寂しくもあり、龕末不體裁なるを以て、小野現市長に「佐賀市史、下巻」の文字揮毫を請ひ、之を本巻の表面と脊部に用ゐたり。

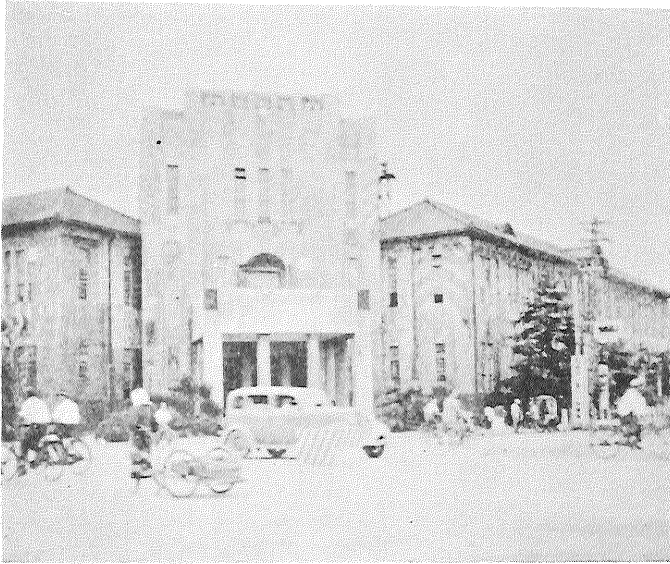
一、この下巻も亦、上巻同様、編輯の順序或は前後し、または記事の統一を缺き、その他編輯の體裁等不備の点多々あるべきは慚愧に堪へざるところである。

一、茲に下巻のト梓せらるゝに当り、敢て一言を添へて識者の諒恕と其の指導を仰ぐ次第である。

時に昭和二十年五月、沖繩本島の大東亞戰報を聞きて書せしを

同二十七年九月顧みて改め記す

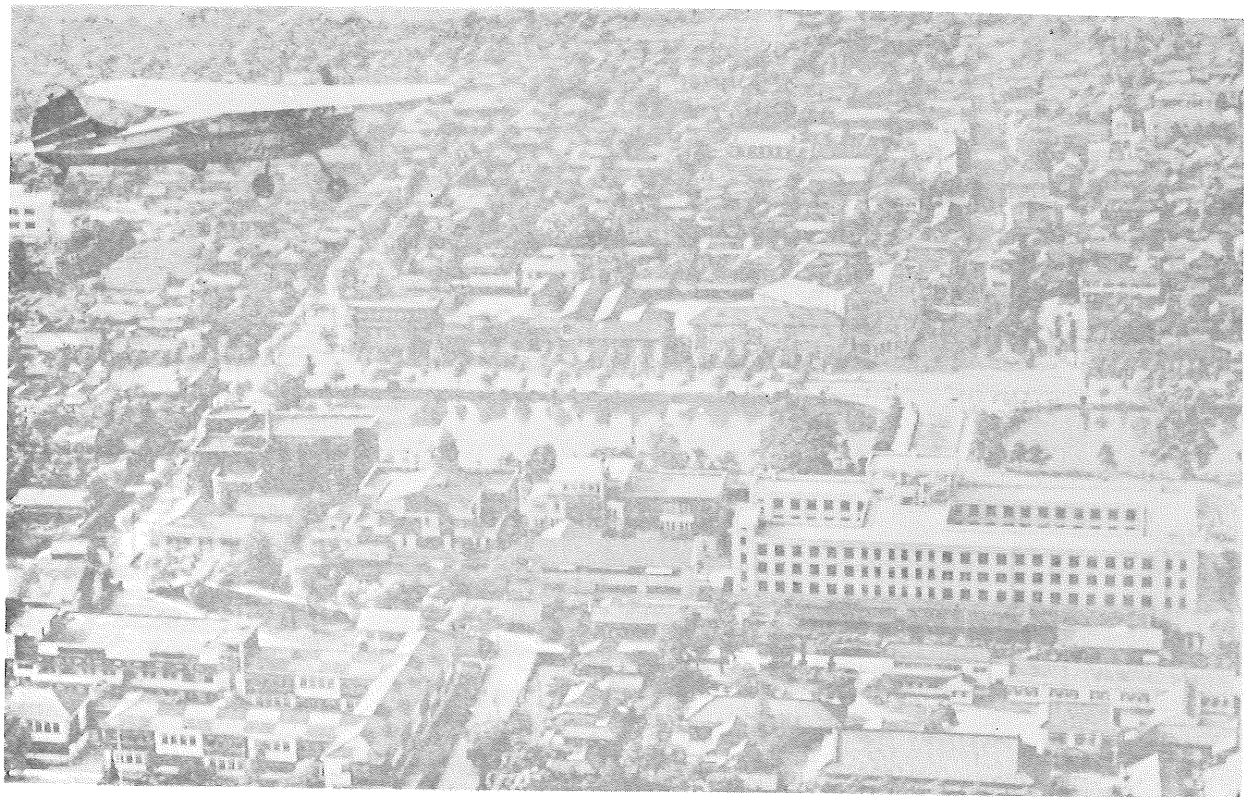
編者 末次 霧 城



市庁舎正面



市役所樓上から県庁を望む



機上より見たる佐賀市中心街



佐 嘉 神 社



市 庁 舎 前 風 景



佐賀城趾



國宝與賀神社棲門

佐賀市史 卷下 目次

第一編 佐嘉城下町

第一章 佐嘉城構築

第一節 工事央に中止……………一

第二節 城下の町々……………二

第三節 武家屋敷(小路)……………五

第二章 城濠一部の埋立

第一節 佐嘉神社外苑施設……………八

第二節 城濠埋立反対説……………九

第三節 埋立工事……………一一

第二編 戸口

第一章 市の戸口

第一節 戸口の増加……………一三

第二節 本籍戸口と寄留……………一六

第三節 職業別……………一九

第三編 財政

第一章 財政の膨脹

第一節 市制当時の物価……………二五

第二章 經費

第一節 歳入……………二六

第二節 歳出……………二九

第三章 特別會計

第一節 水道費……………三二

第二節 衛生基金……………三三

第三節 市庁舎建築積立金……………三三

第四節 協和館基本財産蓄積……………三四

第五節 社会事業資金……………三五

第六節 市営住宅費……………三五

第七節 常設市場費……………三六

第八節 行啓記念蓄積金……………三七

第九節 成美高等女学校基本財産……………三七

第十節 成美高等女学校奨學資金……………三八

第四編 租税と市有財産

第一章 租 税

第一節 徴税の状況……………四三

第二節 諸 税 負 担……………四四

第二章 市 有 財 産

第一節 大正八年の調査……………四七

第二節 大正十五年の調査……………四八

第三節 最近の調査……………五〇

次

第三章 市債

第一節 総額……………五二

第二節 各種市債……………五三

第三節 特別会計所屬の市債……………五五

第五編 金融

第一章 銀行

第一節 銀行の簇立……………五六

第二節 地方金融乱脈……………五八

第三節 其後の協議……………六〇

第四節 百六銀行の増資……………六二

第五節 各銀行モラトリアム……………六二

第六節 佐賀興銀の進出……………六三

第七節 現在存続銀行……………六四

第二章 質屋

第一節 質屋業……………六五

第二節 公益質屋……………六七

第六編 教育

第一章	佐賀文教の起り	
第一節	佐賀に於ける文教	六八
第二節	鍋島直茂の壁書	六九
第二章	聖廟と教育	
第一節	大財村の聖廟	七四
第二節	佐嘉鬼丸の聖堂	七六
第三章	葉隠	
第一節	葉隠れの由来	七七
第二節	三氏の略歴	七九
第三節	葉隠れの内容	八〇
第四章	弘道館	
第一節	歴代藩主の奨学	八三
第二節	弘道館創設事情	八四
第三節	弘道館建設	八五
第四節	弘道館の教則	八六
第五節	齊直時代の弘道館	八九
第六節	士風刷新	九一

第五章 弘道館の擴張

第一節	新設の弘道館	九二
第二節	他藩の遊学生	九三
第三節	蘭学寮の起り	九五
第四節	中折に蘭学寮を設く	九六
第五節	蘭学から英学に	九六
第六節	寺小屋教育	九八

第六章 過渡期の教育

第一節	光岡塾と木原塾	九九
第二節	戊寅義学と栄陽義学	一〇〇
第三節	変則中学校	一〇一
第四節	一郡一中学校	一〇二

第七章	學制と教育令	一〇四
-----	--------	-----

第八章 佐賀縣師範學校

第一節	創設時代	一〇五
第二節	佐賀県尋常師範學校	一〇六

第三節	佐賀県師範學校	一〇七
第四節	現校舍に移転	一〇八
第五節	校長と施設	一〇九

第九章 女子師範學校

第一節	女教員養成所	一一〇
第二節	女子師範學校	一一一
第三節	服装の変遷	一一二
第四節	附属小學校	一一三

第十章 佐賀中學校

第一節	創設時代	一一五
第二節	學校騒動勃発	一一六
第三節	校舍新築と分校独立	一一八
第四節	佐中黄金時代	一一九
第五節	育英会と服装	一二〇
第六節	歴代校長	一二一

第十一章 龍谷中學校

第一節	振風教授と西肥仏教中学	一一二
第二節	第五仏教中学	一一三
第三節	龍谷中学校	一一四
第十二章	佐賀工業學校	
第一節	創立時代	一二六
第二節	學校の悲運	一二七
第三節	工業學校に復興	一二九
第四節	歴代校長	一三〇
第十三章	佐賀農學校	
第一節	創立時代	一三一
第二節	學校移転問題	一三三
第三節	移転開校	一三四
第十四章	佐賀商業學校	
第一節	其の創立時代	一三五
第二節	果立に移管	一三六
第十五章	佐賀高等學校	

第一節	創立時代	一三七
第二節	大演習と本校	一三八
第三節	臨時教員養成所	一四〇
第十六章	元榮城學校	一四一
第十七章	元必習學館	一四二
第十八章	佐賀高等女學校	
第一節	創立と内容充実	一四三
第二節	五ヶ年修業	一四四
第三節	生徒の服装と運動	一四五
第十九章	成美高等女學校	
第一節	前身の兩女學校	一四七
第二節	成美女學校産る	一四八
第三節	成美高等女學校	一五〇
第四節	佐賀市に移転	一五一
第五節	移管後の本校	一五二
第二十章	清和高等女學校	

第一節	創立時代	一五四
第二節	高等女学校に昇格	一五五
第二十一章	佐賀高等裁縫女學校	
第一節	本校の起原	一五六
第二節	学校改築	一五七
第二十二章	佐賀高等簿記學校	一五九
第二十三章	小學校教育	
第一節	明治初年の小學校	一六〇
第二節	尋常、高等の小學校別	一六一
第二十四章	勸興小學校	
第一節	勸興校の生徒	一六三
第二節	侍從御差遣	一六四
第二十五章	日新小學校	
第一節	最初の日新校	一六六
第二節	創立五十年式典	一六七
第二十六章	循誘小學校	

第一節	最初の誘循校	一六八
第二節	放火魔の災禍	一六九
第三節	火災後の復旧	一七〇
第二十七章	赤松小學校	
第一節	校舎は旧城本丸跡	一七一
第二節	創立二十五年式	一七二
第二十八章	神野小學校	
第一節	多布施校と神野校	一七三
第二節	学校の諸設備	一七四
第二十九章	佐賀高等小學校	
第一節	勸興校と成章校	一七五
第二節	男女別の學校	一七六
第三節	女小學校	一七八
第三十章	幼稚園	
第一節	佐賀婦人会附属幼稚園	一七九
第二節	村雲幼稚園	一八〇

第三節 佐賀幼稚園……………一八〇

第三十一章 佐賀盲啞學校

第一節 學校の創立……………一八一

第二節 県立に移管……………一八二

第三十二章 佐賀市教育會……………一八三

第七編 兵 事

第一章 肥 前 武 士

第一節 龍造寺氏と鍋島氏……………一八四

第二節 長 崎 警 備……………一八六

第三節 長崎の填海工事……………一八八

第二章 大 砲 鑄 造

第一節 鑄 砲 の 苦 心……………一九〇

第二節 幕府の大砲鑄造……………一九一

第三章 直 正 雄 圖

第一節 海 軍 の 施 設……………一九四

第二節 直 正 と 天 草 島……………一九五

第四章 海陸の軍備

第一節 藩の海軍創設	一九七
第二節 御火術方設置	一九九
第三節 鐵砲伝来と肥前	二〇一
第四節 洋式銃陣採用	二〇三

第五章 戊辰役と佐賀の役

第一節 戊辰の役	二〇五
第二節 佐賀の役	二〇七
第三節 交戦	二〇九
第四節 佐賀の役平定	一一一

第六章 陸軍

第一節 陸海軍の発達	一一四
第二節 佐賀駐屯部隊	一一六
第三節 干城学校	一一八

第八編 産業

第一章 工業

第一節 佐賀市と工業……………一三〇

第二節 元結、鬘附、織物……………一二一

第三節 硝子、機械、鐵器……………一二六

第四節 壳 藥……………一二八

第五節 酒 と 醬 油……………一二九

第六節 麵 類……………一三〇

第七節 菓子、水 飴……………一三一

第八節 清涼飲料其他……………一三三

第二章 商業

第一節 商業と佐賀市……………一三四

第二節 佐賀商業會議所……………一三五

第三節 佐賀商工会議所……………一三七

第四節 佐賀米穀取引所……………一三八

第五節 商 工 会……………一三九

第三章 農業

第一節 農業と佐賀市……………一四一

第二節 農 産 物……………一四二

第九編 工 藝

第一章 肥前刀

第三節 養	二四四
第四節 菓 製	二四五
第五節 畜 産	二四六
第一節 長瀬の刀匠	二四九
第二節 初代 忠吉	二五一
第三節 忠吉の歴代刀匠	二五三
第四節 忠吉の系統的刀匠	二五四
第五節 刀剣熟再堯	二五七

第二章 彫 刻

第一節 金 工	二五八
第二節 彫 刻	二六〇

第十編 衛 生

第一章 醫 術 と 蘭 學

第一節 蘭學者の養成	二六一
------------	-------	-----

第二章	好生館	日本最初の種痘……………	二六二
第一節	医学校と病院……………		二六四
第二節	好生館の弛張……………		二六五
第三節	好生館の学風……………		二六七
第三章	衛生施設		
第一節	公衆衛生……………		二六九
第二節	塵芥焼却爐設置……………		二七一
第三節	河川浚渫……………		二七二
第四節	伝染病院……………		二七四
第五節	伝染病發生……………		二七五
第六節	種痘……………		二七六
第七節	火葬場施設……………		二七八
第八節	尿尿処分……………		二七九
第四章	市衛生費……………		二八〇
第五章	衛生組合聯合會		
第一節	聯合会の成立……………		二八一

第二節 聯合会の活動……………二八二

第六章 診 療

第一節 病院と医師……………二八四

第二節 薬剤師其他……………二八五

第十一編 社會事業

第一章 救済と施設

第一節 窮民救済……………二八六

第二節 職業紹介所……………二八七

第三節 常設市場……………二八八

第四節 市営住宅……………二八九

第二章 佐賀育児院

第一節 創立と分院……………二九二

第二節 移転と新築……………二九三

第三章 佐賀養老院

第一節 其の創立……………二九四

第二節 維持經費……………二九五

第四章 佐賀縣恒産會

第一節 會の由来……………二九六

第二節 累年成績……………二九七

第十二編 交通

第一章 道路

第一節 国道……………二九九

第二節 市道……………三〇〇

第三節 交通機關……………三〇四

第二章 鐵道と軌道

第一節 鐵道……………三〇七

第二節 佐賀線開通……………三〇八

第三節 軌道……………三一〇

第四節 自動車……………三一一

第三章 市營バス

第一節 バス運轉……………三一二

第二節 路線の譲受……………三二六

第四章 通信機關……………

第一節 郵便電信……………三二八

第二節 電話……………三三二

第三節 ラジオ……………三三四

第十三編 水道

第一章 水道計畫

第一節 佐賀市の飲料水……………三三五

第二節 水道計畫……………三三六

第三節 水源調査……………三三七

第四節 水道布設認可申請……………三三九

第二章 水道反對論

第一節 反対の第一声……………三三〇

第二節 水道延期論……………三三一

第三節 反対運動者の陳情……………三三三

第四節 水道反対市民大会……………三三五

第五節 反對論終熄……………三三六

第三章 事業着手

第一節 工事請負……………三三八

第二節 水源地選定……………三三九

第四章 工事

第一節 各水源地工事……………三四〇

第二節 鐵管布設……………三四二

第三節 給水と通水式……………三四三

第五章 擴張工事

第一節 水源地擴張……………三四五

第二節 第四水源地落成式……………三四六

第三節 給水現狀……………三四七

第十四編 言論機關

第一章 新聞

第一節 日刊新聞……………三四九

第二節 月刊から日刊新聞へ……………三五四

第二章 雜誌

第一節 月刊雜誌……………三五五

第十五編 風流

第一章 書道

第一節 書家の略伝……………三五七

第二章 繪畫

第一節 佐賀と絵画……………三六〇

第二節 画家の略伝……………三六一

第三章 詩歌

第一節 詩文……………三六六

第二節 和歌……………三六八

第四章 俳句

第一節 連歌……………三七〇

第二節 佐賀と俳句……………三七一

第五章 茶道と花道

目次

第一節 茶道……………三七三

第二節 花道……………三七四

第十六編 人物……………三七六

龍造寺家兼 (三七七) 龍造寺隆信 (三七七) 鍋島直茂 (三七九)

鍋島直正 (三八〇) 鍋島直大 (三八一) 成富兵庫 (三八二)

石田一鼎 (三八三) 山本常朝 (三八三) 橫尾紫洋 (三八四)

武富廉斎 (三八五) 古賀精里 (三八六) 深江信溪 (三八六)

枝吉南濠 (三八七) 石井鶴山 (三八七) 古賀穀堂 (三八八)

枝吉神陽 (三八九) 武富圯南 (三九〇) 古川松根 (三九〇)

原田復初 (三九一) 福田東洛 (三九一) 永山二水 (三九二)

草場佩川 (三九二) 中野方藏 (三九三) 江藤新平 (三九三)

島義勇 (三九四) 朝倉尙武 (三九五) 大隈重信 (三九五)

副島種臣 (三九七) 大木喬任 (三九八) 佐野常民 (三九八)

武富時敏 (三九九) 中牟田倉之助 (四〇〇) 真木長義 (四〇一)

宇都宮太郎 (四〇一) 村上格一 (四〇二) 相ノ浦紀道 (四〇二)

中溝徳太郎 (四〇二)

第十七編 神社佛閣

第一章 神社

第一節 無格社	四〇三
第二節 村社	四〇四
第三節 郷社	四〇五
第四節 県社	四〇七
第五節 官幣社	四〇九
第六節 其他の神社	四一〇

第二章 寺院

第一節 寺院宗別	四一二
第二節 各寺院縁記	四一四

第三章 教會

第一節 神道教會	四二二
第二節 仏道教會	四二三
第三節 基督教會	四二四

第十八編 風俗

第一章 佐賀市の習俗

第一節 年中行事(其一).....四二五

第二節 年中行事(其二).....四三二

第二章 民風

第一節 衣食住.....四三六

第二節 冠婚葬祭.....四三八

第三節 土俗(其一).....四四〇

第四節 土俗(其二).....四四四

第五節 時報.....四四九

第六節 佐賀市の徽章.....四五一

第三章 遊戯

第一節 男児の遊戯.....四五三

第二節 女児の遊戯.....四五九

第四章 郷土歌謠

第一節 童謡……………四六四

第二節 民謡……………四六七

第十九編 觀光

第一章 觀光地

第一節 觀光協會……………四七一

第二節 觀光地説明……………四七二

第三節 天然記念物……………四八四

第二章 娛樂場

第一節 劇場……………四八五

第二節 映画常設館……………四八七

佐賀市史下卷目次終

